

土器の様相からみた古代山城

木村 龍生（熊本県教育委員会）

1. はじめに

古代山城の分析は、これまで遺構中心に行われてきた。これは調査例が少ないこと、出土遺物数が少ないことに加え、遺構は調査されていなくてもすでに露出しているものがあることなどが理由に挙げられる。ただ、最近では鞠智城や鬼ノ城など、調査が進展し遺物などの検討が詳細に行われる城跡も増えてきた。

今回取り上げる土器についても、これまでは古代山城の時期を決める根拠の一つとしての利用はされていたが、それ以上の分析は行われていなかった。しかし、先述したように、鞠智城跡や鬼ノ城跡で土器自体の分析が行われたことにより、土器の様相から古代山城の性格などについて、その一端を語るができるようになってきたように思われる。

そこで、ここでは各古代山城の土器の様相を示し、そこからどのようなことがいえるのかについて検討してみた。分析の手法としては、筆者が分析を担当した鞠智城跡の土器の様相をまず提示し、それと他の山城の様相とを比較することで類似点、差異を検出し、そこから検討を行うという方法をとった。

2. 鞠智城跡出土土器の様相

（1）鞠智城跡出土の土器について

昭和44年から32次にわたって発掘調査が実施された鞠智城跡では、他の古代山城と比べ土器の出土量ははるかに多い。

鞠智城跡出土土器は、遺構に伴うものは少ない。そのため、個別の遺構の時期を土器から特定することは、極めて難しい。

しかし、土器の変遷や出土量を検討することから、鞠智城の存続期間、各段階の様相を推測することができると考え、分析を行った。

（2）出土土器の器種組成

土器は、須恵器と土師器が存在する。須恵器は蓋坏、高坏、臚、壺、甕、平瓶、高台付坏、円面碗などが出土し、土師器は坏、高台付坏、皿、椀、高坏、甑、壺、甕などが出土している。

須恵器、土師器それぞれについて、器種組成の割合を検討してみた。この検討は、これまでの調査で出土した土器のうち、一個体と確実に判断できる資料のみを用いて行った。なお、本来ならば時期ごとに器種組成の割合を検討すべきだが、甕や壺などの小破片では時期を特定できないため、時期ごとの器種組成の割合を正確に出すことは困難と思われた。そのため、あくまで鞠智城跡出土土器全体の特徴として把握することを目的とし、時期を検討せずに器種組成の割合を提示することとした。

図1は、鞠智城跡における須恵器と土師器の器種組成の割合である。これをみると須恵器、土師器共に日常生活で使用する坏類、甕類が圧倒的に多いことがわかる。須恵器で

は、瓶類や壺類も比較的多くみとめられるが、これらも日用品であったといえる。また土師器では、坏類・甕類に次いで甗、皿が多くなっていることに注目したい。甗は調理器具であり、それ以外に使用されることはまずない。皿も坏と共に日用什器として使用されたものである。

このように、鞠智城跡で出土している土器は、そのほとんどが日用什器であり、この地での人々の生活用品として使用されていたものであったといえる。そうであるならば、土器がどの程度の期間存在するのか、その各時期の土器の量はどのようであったのかということは、鞠智城における人々の生活の実態を如実に示しているといえる。

(3) 出土土器の変遷

鞠智城跡出土の土器は、同一の層からいくつかの時期の土器が混在して出土し、単一時期と考えられる層の堆積が存在しないため、出土層位の上下で遺物の新旧を確認することは難しい。また、須恵器は複数の生産地の製品が鞠智城へ供給されていることが肉眼観察で確認できる。この時期の須恵器は、6世紀後半からの地方窯の増加とそれに伴う地域性の現出により、同時期の須恵器でも産地が違えば異なる様相をもっている場合が多い。そのため、単一生産地からの連続した製品供給であれば消費地遺跡でも須恵器の型式変化を容易に検討することはできるが、複数の生産地から供給されている場合、イレギュラーな要素をもつ須恵器が存在すると、いろいろと誤った解釈をする危険性がある。

当初は鞠智城跡における土器の型式変化を検討して土器編年案を作成しようと考えていたが、上述の理由からそれは困難であると判断した。そこで、既存の編年案（小田富士雄氏、網田龍生氏）を基に土器を時系列にならべることで、鞠智城跡の土器がどの程度の期間存在するのかをみることにした。

鞠智城跡の土器を時系列にならべたものが図2である。

これをみると、6世紀第3四半期から10世紀第3四半期まで400年近い時期の土器が出土していることがわかる。これを基に時期的な土器の変遷をみていきたい。

6世紀第3四半期から7世紀第2四半期では、古墳時代後期後半～終末期に相当する。長者原地区に古墳時代の集落跡が存在することが明らかとなっており、この時期の土器はこれらの集落跡に関連する土器であったと考えられる。

7世紀第3四半期は、須恵器の坏蓋と坏身が逆転する段階で、古墳時代的な坏蓋（坏H）は存在しなくなる。なお、この時期は大野城など古代山城の築城記事がみとめられる665年を包括する時期にあたる。鞠智城が665年に近い時期に築城されたということであれば、この段階の土器は鞠智城築城期の土器ということになる。

7世紀第4四半期から8世紀第1四半期は、様々な器種の須恵器がみとめられる。本来ならば、この段階も他の段階と同じく四半世紀ごとに分けるべきかもしれないが、土器をみると2時期に分けるのは難しく、無理に分けずに一つの段階として捉えた方がよさそうであった。そのため、ここでは7世紀第4四半期から8世紀第1四半期で一つの段階として取り扱っている。ただし、この段階の土器は8世紀第1四半期の中でも、さらに早い段階までのものである（8世紀初頭とするのが妥当と思われる）。この段階の特徴は、そのほとんどが須恵器であるということ、畿内系の土師器が存在することである。なお、この時期は日本書紀にみる798年の鞠智城の繕治期の前後に相当する。

8世紀第2、3四半期になると、土器はみとめられない。土器の空白期というべき時期である。

8世紀第4四半期になると、再び土器が出現する。須恵器と土師器の割合は、須恵器の方が圧倒的に多い。土師器はこの時期の熊本の特徴である回転ヘラミガキが施されるものなど在地的な様相をもつものがみられるようになる。

9世紀第1、2四半期になると、土師器のみとなる。土師器は在地的要素をもったものが多く存在する。

9世紀第3、4四半期になると、土師器の坏、高台付坏が多くみとめられる。形態は近隣の木柑子西原遺跡や上鶴頭遺跡などから出土するものに酷似し、完全に在地の土器が使用されていると考えられる。

10世紀第1、2四半期の土器は確認できない。

10世紀第3四半期頃になると、若干の土師器が確認できる。

そして、これ以降は中世の土師器や青磁がまばらながら存在する。これらは鞠智城が廃絶した後にこの地がなんらかの土地利用されていたことを物語っているのであろう。

(4) 出土土器の量的検討

出土土器の時期別出土量についてみる。これにより、日用什器中心の鞠智城において、土器量から人が最も活発に活動していた時期を想定できると考えたためである。

図3は、鞠智城跡出土土器の時期別出土量を示したものである。これをみると、出土量のピークがいくつかあることがわかる。

1つめのピークは7世紀第4四半期から8世紀第1四半期である。この時期は他の時期に比べ圧倒的に多くの土器が存在する。そしてそのほとんどが須恵器であるということは注目すべきである。また、土師器は若干数存在するが、これは先述したように在地の土師器ではなく畿内系の土師器等、在地的な様相を持たないものである。

2つめのピークは9世紀第3、4四半期である。この時期には土器は土師器のみになっており、すべて在地的なものになっている。

3つめのピークとして敢えて挙げるならば、8世紀第4四半期が挙げられる。直前の空白期から一気に増加する時期である。

ピークとは反対に、二つの空白期が存在することも注目すべきである。1つが8世紀第2、3四半期、もう一つが10世紀第1、2四半期である。この二つの空白期は、共に土器の使用量ピークの直後に位置する。これがどういう意味をもつのかについては土器のみならず、鞠智城全体をとおして検証する必要がある。

(5) 土器の生産地分析

鞠智城跡出土土器の一部資料について、考古学的手法（肉眼観察）及び理化学的手法（蛍光X線分析）による胎土分析を実施した（木村編 2015）。

考古学的手法では生産地を推定できる資料は少なかったが、検討できる資料については、福岡県牛頸窯跡群、福岡県八女窯跡群、熊本県荒尾窯跡群、宇城市宇城窯跡群などの製品が鞠智城にもたらされていると推定できた。なお、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期は、これら様々な生産地の製品が鞠智城にもたらされているが、8世紀第4四半

期は荒尾窯跡群の製品がそのほとんどを占めるようになっていることがわかった。

理化学的手法でも、肉眼観察とほぼ同様の結果が出た。理化学的手法では、畿内系と考えられる暗文の施された土師器碗と特徴が似ている資料の分析を行ったが、これに関しては生産地不明という結果であった。そのため、畿内かその周辺でつくられたものが鞠智城に持ち込まれたものと考えられる。

考古学的手法、理化学的手法を総合して鞠智城跡出土土器の生産地を考えてみる。鞠智城が築城される以前から牛頸、八女の製品がもたらされており、鞠智城築城後8世紀第1四半期まではそれに加え荒尾や宇城の製品ももたらされるようになっている。なお、考古学的手法でみるとはこれらの生産地とは全く異なる特徴を持つ製品も存在することから、他にも様々な生産地の製品が鞠智城に供給されていたことが想定できる。これは、鞠智城の運営のために、様々な生産地から必要な食器を集めて供給されていたからと考えることができよう。

8世紀第4四半期になると荒尾の製品がそのほとんどを占めるが、これは牛頸窯跡群の須恵器生産量が減少しているのに対し、荒尾窯跡群の操業が本格化し生産量が増加したことと関連するものと思われる。

(6) 土器からみた鞠智城

これまでの検討からわかった土器の様相から、鞠智城について述べてみたい。

6世紀後半から7世紀第2四半期 鞠智城の中心域に古墳時代の集落が存在し、この時期の土器はそこで使用されたものである。この集落は鞠智城築城直前まで存在しており、ここに住んでいた人々は鞠智城の築城ともなんらかの関係があったとも考えられる。須恵器は牛頸窯跡群や八女窯跡群で製作されたものが多く存在する。これはこの時期の山鹿・菊池地域の古墳、集落でみられる普遍的な状況であり、鞠智城集落でも同じ状況であったといえる。

7世紀第3四半期 白村江の戦いの時期にあたり、古代山城が築城された時期である。この時期の土器はそれ以前と比べると数が少し増加している。しかし、土器の種類、生産地などの様相は7世紀第2四半期までとほぼ変わらず、土器だけをみて、この時期になにか特別な画期を設定することはできない。

7世紀第4四半期から8世紀第1四半期 土器の量が最も多くなる段階である。土器は基本的に須恵器のみで、一部に畿内系の土師器など在地的ではない土器が存在する(図4)。須恵器は牛頸窯跡群や八女窯跡群など以前から供給されていた生産地のものに加え、さらに宇城窯跡群などその他何カ所もの生産地から供給されていたようである。この段階は『続日本紀』にいう繕治の時期(698年)にあたる。古代山城は、国家プロジェクトとして築城されたものであり、この時期も中央政権の管理下に置かれていた。だからこそ土器などの必要物資は、様々な生産地などからかき集められて供給されていただろうし、土師器ではなくより貴重な須恵器が多く供給されていたのであろう。また、土器の出土量からみると、この段階が最も多くの人々が鞠智城に駐留した時期だったと考えられる。畿内から来た人もいたのであろう。この時期の人々が、城の繕治に携わった人々なのか、それとも単に駐留者が増えたのかは土器のみでは判断できない。しかし、鞠智城の全盛期ということは確実にいえる。鞠智城跡の土器からみる最大の画期に位置づけられる。

8世紀第2、3四半期 土器が存在しない空白期といえる。この直前が土器からみると鞠智城のピークともいうべき時期であったのに対し、この急激な土器の減少は何を意味するのであろうか。土器が存在しないということは、鞠智城に人がいなかったとも捉えられる。生活域が城内から城外に移転したのだろうか。また、ここでいったん鞠智城が廃城となったことも考えられる。大野城・基肆城をのぞく他の古代山城が8世紀前半で廃城となっているのと同じように、鞠智城も古代山城としての役割を一度この段階で終了したということも考えられるのではないか。

8世紀第4四半期 再び土器が使用されはじめる。須恵器が主体で、特に荒尾産須恵器が多い。これは、この時期に牛頸窯跡群の操業規模が縮小するのに対し、荒尾窯跡群が最盛期を迎えるということにも関係すると思われる。また土師器は在地的なものがほとんどである。このようなことから考えると、この時期からは鞠智城へ供給される土器はすべて肥後国内あるいは鞠智城の近隣で生産されたものになったといえる。これについては、8世紀後半に鞠智城の管轄が大宰府から肥後国に移り、そのため使用される土器は肥後国内のものが供給されるようになったというような解釈が成り立つかもしれない。

9世紀の第1四半期以降 土師器のみが使用される。9世紀の第3、4四半期は土器使用量第2のピークである。この時期の土器は周辺遺跡で出土する土器とまったく同じ様相を呈していることから、すべて在地でつくられたものになっている。なお、858年に菊池城院の不動倉11棟が火災に遭うとの記事があるが、土器からみると不動倉の火災後にも多くの人々が鞠智城において活動をしていたということがいえる。

10世紀以降 10世紀第1四半期に、再度、空白期が訪れる。10世紀第3四半期には土器が再び使用されているが、量は少ない。おそらくこの時期に鞠智城は最終的に廃絶し、その後は別の目的でこの地は使用されたと考えられる。

土器の様相からみた鞠智城は以上のようなになる。

これを踏まえて、最後に鞠智城の存続期間について考えておきたい。土器でみると2回の空白期が存在する。この空白期を「鞠智城の変遷に伴うなんらかの理由で土器が存在しない時期」ととらえるか、「異なる施設がつけられ廃絶したその中間の時期」としてとらえるかでその意味合いが大きく変わってくる。前者だと、鞠智城が300年続く中で土器が存在しない時期として空白期があるという説明ができる。後者だと、古代山城としての鞠智城築城・廃絶（7世紀第3四半期から8世紀第1四半期）→空白→菊池城院成立・廃絶（8世紀第4四半期から9世紀第4四半期）→空白→別の施設等（10世紀第2、3四半期）という考え方もできる。現在は前者で考えられることが多い鞠智城だが、後者のような推移があった可能性も考えられる。

3. その他の古代山城出土土器の様相

同じような視点で、他の古代山城についても同様の分析を試みた。ただし、城によっては土器出土数が少なく分析に耐えうるものではないものも存在するが、あえて同様の分析を行った。今回は報告書等掲載遺物しか分析の対象としていないため、城によっては実際の様相を反映していない可能性があることを述べておく。なお、報告書掲載遺物のうち時期の判断ができるもののみを対象としている。そのため、表1、2では坏など偏った器種のみが対象となっている。また、鞠智城跡の土器と同様に、7世紀第4四半期と8世紀第

1 四半期の土器を区分するのが非常に難しかった（正確にいうと 7 世紀末から 8 世紀初に位置付けるべき資料が多かった）。よって、鞠智城跡での土器と同じように、この時期については 7 世紀第 4 四半期から 8 世紀第 1 四半期という時期区分とした。

対象としたのは、報告書などにおいて土器の報告がされている 12 城である。

（1）大野城跡の土器の様相（図 5）

大野城跡からは、坏、皿、甕、壺などの日用什器が出土している。大野城跡については地区ごとに報告されているため、地区ごとに分析を行った。これらの時期は、7 世紀第 3 四半期のものがもっとも古く、その後も継続して 10 世紀までの土器が出土している。土器の数量でみると、7 世紀第 4 四半期から 8 世紀第 1 四半期に急増する。698 年の繕治に関係するものであろうか。この時期のものには、畿内系と思われる暗文の施された皿もある。8 世紀代はやや減少するが、9 世紀第 3 四半期ごろに再び増加する。築城から 8 世紀前半までは須恵器主体であるが、それ以降土師器のみとなる。これらのことは、鞠智城での土器の様相とも一致する。地区ごとにみると、7 世紀第 3 四半期の土器は石垣などの地区でみられ、7 世紀第 4 四半期以降は城門や倉庫等が立ち並ぶ各地区でしか土器は出土していないような傾向がみとめられる。7 世紀第 3 四半期に外郭施設、7 世紀第 4 四半期以降に城内施設の拡充が図られたことを表しているのかもしれない。また、猫坂、主城原、村上地区では 7 世紀第 4 四半期から 8 世紀第 1 四半期の土器が主体、八ツ並地区では 9 世紀後半代以降の土器が主体ということから、時期による地区の使い分けなどが行われていたかもしれない。

（2）基肄城跡の土器の様相（図 6）

基肄城跡からは、坏が多く、他に高坏や甕も出土している。こちらも日用什器主体といえる。土器の時期は、7 世紀第 3 四半期のものがもっとも古く、9 世紀初頭のものまである。7 世紀第 4 四半期に若干量が増えるがこれは繕治に関係があるものだろうか。なお、8 世紀代 4 四半期から 9 世紀初頭のものが多い。文献では 9 世紀までの存続が確認されているため、土器の様相と一致する。なお、須恵器が主体である。

（3）金田城跡の土器の様相（図 7）

金田城跡からは、坏、高坏、瓶などの須恵器、土師器が出土している。また、新羅系の陶質土器、玄界灘式製塩土器も出土している。基本的に日用什器主体である。金田城跡で最も古い土器は 7 世紀第 3 四半期のものである。そして、7 世紀第 4 四半期から 8 世紀第 1 四半期までのものしか存在しない。このような土器の様相からみると、金田城は 667 年に築城され、8 世紀の第 1 四半期には廃城となったと考えてよいと思われる。なお、報告書では掲載されていない小破片が多数存在するとの記載がある。それらを実見して再度検討してみたい。

（4）屋嶋城跡の土器の様相（図 8）

屋嶋城跡からは、須恵器の坏、壺、瓶などが出土している。日用什器である。もっとも古いものは 7 世紀第 2 四半期と考えられる坏がある。しかし、屋嶋自体が古代山城以前・

以降に何度も利用されており、様々な時代の遺物が存在する。そのため、この坏もどこから紛れ込んだ可能性もある。古代山城に関係するものは7世紀第3四半期～8世紀第1四半期のものがある。このころは667年に築城されたという記事とも一致する。また、金田城と同じく、8世紀第1四半期には廃城となったことも考えられる。

(5) 鬼ノ城跡の土器の様相 (図9)

鬼ノ城跡からは、坏、皿、壺、瓶、甕などの日用什器が主体的に出土している。このほか、硯が出土している点は注目すべきである。なお、坏の一部にも硯に転用しているものが存在するとのことである。このことから、役人が在城していたことも考えられる。土器の時期を見てみると、7世紀第3四半期のものが若干数存在するが、その中心は7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のものとなる。須恵器の量が圧倒的に多いが、土師器も存在する。なお、土師器には畿内系のものが存在する。この様相は、大野城跡、鞠智城跡での土器の在り方と非常によく似ている。8世紀、9世紀は土器が激減するが、9世紀終わりごろに土器が再び登場する。これは再利用されてつくられた宗教施設に関係するものとされる。鬼ノ城は築城記事などのない城であるが、土器の様相からみると7世紀第3か第4四半期に築城され8世紀第1四半期まで古代山城として存続したものと考えられる。岡山県が刊行した報告書では7世紀第4四半期ごろに築城されたと結論付けられたが(金田・岡本編2013)、土器の様相からみると、例えば7世紀の第3四半期にいったん築城され、大野城、基肄城、鞠智城で行われた繕治のようなもの(鬼ノ城の場合は、中央政権による地方支配の強化のためか)で7世紀第4四半期ごろに土器の量が急増したということも考えられるかもしれない。

(6) 大廻小廻山城跡の土器の様相 (図10)

大廻小廻山城跡からは、須恵器の坏、壺などが出土している。日用什器が主体的である。時期は7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のものである。点数が少ないため何ともいえないが、築城あるいは運営されていた時期の一端を示す資料であると思われる。つまり、この時期のみの短期間の城であったことも想定できる。なお、9世紀第3四半期ごろの土師器も出土しており、この時期に再利用されたようである。

(7) 讃岐城山城跡の土器の様相 (図11)

讃岐城山城からは、須恵器の坏、平瓶が出土している。日用什器が主体的である。時期はすべて7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のものである。こちらも点数が少ないため何ともいえないが、これらは築城あるいは運営されていた時期の一端を示しており、この時期のみの短期間の城であったことが想定できる。

(8) 永納山城跡の土器の様相 (図12)

永納山城跡からは、須恵器の坏、土師器の坏が出土している。日用什器が主体的である。須恵器はもっとも古いものは7世紀第2四半期のものが1点存在する。7世紀第3四半期のものも1点存在するが、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のものが中心となる。土師器は畿内系のものである。7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に土器が集中

し、畿内系の土師器が存在するという点は、大野城跡、鞠智城跡、鬼ノ城跡と同様である。これらのことから考えると、永納山城跡も、7世紀第3か第4四半期に築城され8世紀第1四半期まで存在した城と考えるのが妥当と思われる。

(9) 御所ヶ谷城跡の土器の様相 (図 13)

御所ヶ谷城跡からは、須恵器の坏、壺、土師器の坏、甕などが出土している。日用什器が主体的である。須恵器壺、土師器甕は7世紀第3四半期のものとされる。その後、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のものがあり、しばらく時期を置いて、8世紀後半から9世紀前半の土器が存在する。このことから7世紀第3四半期ごろに築城され、8世紀第1四半期ごろまで古代山城として機能していたものと考えられる。そして、8世紀後半ごろに何らかの形で再利用されたのではないだろうか。

(10) 唐原城跡の土器の様相 (図 14)

唐原城跡からは、須恵器坏が出土している。特徴的なのは、7世紀第1～2四半期のものが存在することである。そのほかに7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のものが出土している。これだけでは点数も少なく何ともいえないが、7世紀前半代も何かの施設として使用され、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に古代山城として整備されたといえることができるのではないだろうか。

(11) 鹿毛馬城跡の土器の様相 (図 15)

鹿毛馬城跡からは、7世紀第1四半期とされる須恵器甕が出土している。これだけでは何ともいえないが、この時期からこの地が何らかの形で利用されていたといえるかもしれない。

(12) 阿志岐城跡の土器の様相 (図 16)

阿志岐城跡からは須恵器坏4点が出土している。これらは7世紀第4四半期から8世紀第1四半期のもので、阿志岐城の築城・運営時期を示しているものと考えられる。

4. 土器の様相からみた古代山城 (予察)

(1) 築城・存続時期について

各古代山城の土器の消長からみると、今回検討の対象とした山城の築城・存続時期はいくつかのグループに分けることができるように思われた。そこで、それをもとに以下のように分類してみた。

- A－1. 7世紀第3四半期～長期継続 大野城、基肄城、鞠智城、御所ヶ谷城
- A－2. 7世紀第3四半期～8世紀第1四半期 金田城、屋嶋城
- B. 7世紀第3・4四半期～8世紀第1四半期 鬼ノ城、永納山城
- C. 7世紀第4四半期～8世紀第1四半期 大廻小廻山城、讃岐城山城、阿志岐城
- D. 不明 唐原城、鹿毛馬城

Aは白村江の戦い直後から土器が存在するグループで、その中でも長期間継続するもの（A-1）と、8世紀第1四半期までで土器が出土しなくなるもの（A-2）に分けられる。A-1は他の遺物や文献などでも長期間の存続がみとめられるもので、土器からもこれが実証できたということがいえる。なお、御所ヶ谷城は8～9世紀の土器が数点あるためA-1に分類しているが、大野城、基肄城、鞠智城と同じような長期にわたる継続であったかどうかはわからない。鬼ノ城のような山城以外の施設としての再利用であれば、A-2に含む方が適当となる。A-2は8世紀第1四半期までで土器が出土しなくなる。

Bは白村江の戦い直後ではなく若干下った時期からの土器が出土するグループである。古い土器はあるが、数量の割合などからみるとAよりも若干時期を下げた方が良く考えた。これらも8世紀第1四半期までで土器が出土しなくなるが、鬼ノ城はもう少し長く存続した可能性がある。また、鬼ノ城は9世紀に宗教関連施設として再利用されている。

Cは7世紀第4四半期～8世紀第1四半期からの土器が出土するグループである。これらはこの時期のみの短期的な利用だったかもしれない。ただし、大廻小廻山城は9世紀以降に再利用されている。

Dは不明とした。7世紀前半代の土器がいくつか出土しているだけなので時期の判断が難しい。この時期に築城されたととらえられるし、これらは築城以前の施設のものであることも考えられるためである。

これからみると、朝鮮式山城と呼ばれるものは白村江の戦い直後に築城され、神籠石式山城と呼ばれるものはそれよりもやや遅れて築城されたような傾向がみとめられる。また、神籠石式山城でも、白村江の戦い直後か若干下がった時期に築城されたものと、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に築城されたとみて取れるような傾向がみとめられる。

なお、AもBも最も土器量が多いのは7世紀第4四半期～8世紀第1四半期である。『続日本紀』に記述のある大野城、基肄城、鞠智城の繕治の時期にあたるが、この時期は他の城も同様の改修等を行ったのかもしれない。それに加え、Cに分類されるような新たな城を築いているという状況である。つまり、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期が古代山城が最も整備・拡充され、機能した時期であったということが出来る。これは白村江の戦い以降の対外政策のためのものというよりも、中央政権による地域支配の強化をもくろんだ対内用の政策の一環であったと考えられる。

（2）須恵器から土師器へ

どの城でも、8世紀第1四半期までについては基本的に須恵器が主体である。土師器は若干数しかない。その若干数の中には畿内系土師器を含む城がいくつか見受けられる。

8世紀後半以降は須恵器よりも土師器が主体となる。

これについては古代山城周辺の遺跡の様相と比較する必要があるが、中央政権によって築造された古代山城には優先的に須恵器が供給されていたということがいえるかもしれない。

（3）畿内系土師器と鍛冶関連遺構・遺物（7世紀第4四半期～8世紀第1四半期）

今回土器を検討していて、畿内系土師器が出土している古代山城には、必ず鍛冶関連遺物・遺構が存在することにふと気づいた。しかも、時期的にはすべて7世紀第4四半期～

8 世紀第 1 四半期に該当する。

○畿内系土師器＋鍛冶関連遺構・遺物のある城

大野城	畿内系土師器、韃羽口、砥石、鉄製品
鞠智城	畿内系土師器、鉄滓、韃羽口、砥石、漆塗りの土器（パレット）
鬼ノ城	畿内系土師器、鉄滓、韃羽口、鍛冶遺構
永納山城	畿内系土師器、鉄滓、韃羽口、鍛冶遺構

○鍛冶関連遺物・遺構のある城

基肄城	鉄滓
金田城	鉄滓、砥石、鍛冶遺構
大廻小廻山城	鉄滓
鹿毛馬城	鉄滓

鍛冶関連遺構・遺物の存在する基肄城跡や金田城跡でも、今後の調査によって畿内系土師器が出土する可能性があると思われる。大廻小廻山城、鹿毛馬城でも鉄滓が出土しているが、これらは時期等の詳細は不明であるため、古代山城に伴うものであるかどうかはわからない。

なお、畿内系土師器＋鍛冶関連遺構・遺物を持つ城はすべて亀田修一氏のいう“完成された城”である（亀田 2014）。そうであるならば、同じく“完成された城”とされる御所ヶ谷城でも今後、畿内系土師器＋鍛冶関連遺物・遺構が検出されるかもしれない。

畿内系土師器＋鍛冶関連遺物・遺構のある城とない城、これが古代山城を分類する一つのポイントになるかもしれないと考えている。

（4）7 世紀第 3 四半期よりも古い遺物を持つ城

古代山城は白村江の戦い以降に築かれた城とされるが、鞠智城、唐原城、鹿毛馬城からは白村江の戦い以前の土器が出土している。鞠智城については古墳時代から続く集落の存在が確認されており、それに伴う遺物であることがわかっている。他の 2 城は遺構など不明であるが、築城以前に存在した施設等に伴うものであると考えられる。

この 3 城に共通することは、他の古代山城と比べて標高の低いところに築かれていることである。鞠智城は標高 90～170 m、唐原城は標高約 70 m、鹿毛馬城は標高 30～80 m と、他の古代山城に比べかなりの低地に立地する。このことから考えると、古代山城築城以前にも何らかの利用がされていたものと考えられる。つまり、このような低い立地に存在する古代山城は、前時代から利用された施設を引き継ぐ、あるいは撤去・改修・再整備して城として利用された可能性もあるといえる。このほか、今回は取り上げていないが、女山城も標高が低く、城内外に 7 世紀代の古墳が築造されており、城の築城以前から利用されていたことがわかっている。

このような築城以前の土地利用の類似する例として、大宰府があげられる。大宰府でも発掘調査で大宰府成立以前の遺物・遺構が多くみつかり、大宰府が設置される以前から何らかの施設として利用されていたといえる。そして、おそらく白村江の戦い以降に九州を総括する役所として整備されたと考えられるが、その際、一から新たに作り上げた

のではなく、それ以前から存在した施設などを撤去・改修・再整備して利用したものと考えられる。大宰府が大野城や基肄城や都城などのように何年に築かれたと史書に記載がないのは、もともとあった何らかの施設を再整備したためではないだろうか。その後、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけて、あらためて政庁として整備しなおしたのだろう。これと同じことが、鞠智城にもいえる。筆者は、鞠智城も白村江の戦い後にそれまであった施設に土塁、城門、貯水池などを急造し、倉庫や兵舎等の建物を建造することで、城として再整備したものと考えている。そして、698年の修繕で大規模な改修が行われたのだろう。そのため、史書に築城年代が記載されなかったのではないだろうか。

これに対し、大野城、基肄城等の7世紀第3四半期以降の土器しか出土しない城は、標高も高く、山の中腹より上部に築かれており、それ以前に別の施設等として使用されていた痕跡は認められないものが多い。これらは白村江の戦い以後に、当初から城として新たに築城するべく選地が行われ、築かれたものである。

つまり、古代山城には白村江の戦い以後に、十分な選地を行い新規に築城したもの（新規築城型）と、以前からあった施設のうち城として利用できそうな立地にあるものを再整備したもの（再整備型）の2つに分類できないかということである。城の立地の違い（高地・低地等）も、これで説明できそうな気がする。白村江の戦い以後にすべての城を新たに一から築くのは、人員・物資ともに確保することは困難といえる。そのため、白村江の戦い以前から存在する施設で利用できそうなものは、拠点として再整備したと考えられないだろうか。これに関してはほかの要素を踏まえて検討していく必要があるが、このような分類もできるかもしれないということを述べておく。

5. おわりに

以上、土器の様相からみた古代山城について述べてきたが、やはり資料数が少ない城が多く、今回の検討が的を射たものになっているのか正直不安である。しかし、土器の様相から城の築城時期や存続時期についてはある程度言及することができた。ただし、7世紀前半の土器が出土する山城については、あらためて資料数が増加した時に検証する必要がある。

畿内系土師器と鍛冶関連遺構・遺物の有無が“完成された城”とそうでない城との違いになる可能性も指摘した。これについても今後の古代山城調査の進展に伴い、あらためて検証していくべきことだと思っている。

現状の少ない資料数の中で検討してみたが、やはり今後の古代山城調査の進展と資料数の増加を待って、あらためて検討をしていくことが重要であると考えます。

【参考・引用文献】

網田龍生 1994 「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究 熊本大学考古学研究室創設 20 周年 記念論文集』 龍田考古学会

亀田修一 2014 「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ－論考編 1－』 熊本県教育委員会

亀田修一 2015 「古代山城を考える－遺構と遺物－」『古代山城と城柵調査の現状』平成 27 年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第 28 回研修会発表要旨集 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

木村龍生編 2015『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』 熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

(大野城)

福岡県教育委員会編 1976『特別史跡 大野城跡 大石垣、八ツ並地区建物跡史跡環境整備に伴う発掘調査概報』 福岡県教育委員会

高倉洋彰・横田賢次郎・高橋 章・沢田康夫編 1977『特別史跡 大野城跡Ⅱ 八ツ波、猫坂地区建物跡 史跡環境整備に伴う発掘調査概報』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・芳沢 要編 1979『特別史跡 大野城跡Ⅲ 主城原地区発掘調査概報・整備概要（1）』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・芳沢 要編 1980『特別史跡 大野城跡Ⅳ 主城原地区・北石垣発掘調査概報・整備概要（2）』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・高橋 章編 1982『特別史跡 大野城跡Ⅴ 主城原地区（第4次）・村上地区（第1次）発掘調査概況』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・森田 勉・横田義章・倉住靖彦・石丸 洋編 1983『特別史跡 大野城跡Ⅵ 村上地区（第2次）・坂本口土塁発掘調査概報』 福岡県教育委員会

横田賢次郎編 1991『特別史跡 大野城跡Ⅶ 太宰府口城門跡発掘調査概報』 福岡県教育委員会

田上 稔編 2006『特別史跡大野城跡整備事業 太宰府口城門・尾花地区・百間石垣整備事業報告』 福岡県文化財調査報告書第210集 福岡県教育委員会

小澤佳憲 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ 平成15年7月豪雨災害復旧事業報告』 福岡県文化財調査報告書第225集一下巻一 福岡県教育委員会

(基肄城)

田平徳栄・亀田修一編 1977『特別史跡 基肄城跡 林道建設計画に伴う確認発掘調査報告書』 基山町文化財調査報告書第2集 基山町教育委員会

(金田城)

古門雅高・本田秀樹・田中淳也編 2000『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ』 美津島町文化財調査報告書第9集 長崎県美津島町教育委員会

古門雅高・田中淳也編 2003『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ』 美津島町文化財調査報告書第10集 長崎県美津島町教育委員会

(鞠智城)

西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』 熊本県文化財調査報告第276集 熊本県教育委員会

(屋嶋城)

山元敏裕編 2003『史跡天然記念物屋島 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ』 高松市埋蔵文化財調査報告第62集 高松市教育委員会

山元敏裕編 2008『屋嶋城跡Ⅱ 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ』 高松市埋蔵文化財調査報告第113集 高松市教育委員会

(鬼ノ城)

村上幸雄・松尾洋平編 2005『古代山城 鬼ノ城 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査』 総社市埋蔵文化財発掘調査報告18 総社市教育委員会

松尾洋平・谷山雅彦編 2006『古代山城 鬼ノ城2 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査 東門、第1

- 水門貯水池ほか』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19 総社市教育委員会
金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡 鬼城山 2 「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236 岡山県教育委員会
(大廻小廻山城)
出宮徳尚・乗岡 実編 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
(讃岐城山城)
渡邊 誠 2013「讃岐に築かれた二つの古代山城－「地方」の成立という視点から－」『シンポジウム
讃岐国の幕開け－讃岐国府跡の発掘調査成果とその時代－』香川県埋蔵文化財センター・坂出市
教育委員会
(永納山城)
渡辺芳貴・半沢直也編 2005『永納山城跡－平成 14 年度～16 年度調査報告書－』西条市埋蔵文化財
調査報告書 西条市教育委員会
渡邊芳貴編 2012『史跡 永納山城跡Ⅱ－内部施設等確認調査報告書－（平成 21～23 年度調査）』西
条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 3 集 西条市教育委員会
(御所ヶ谷城)
小川秀樹編 2006『史跡御所ヶ谷神籠石－福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城跡の第 1 次～第 11
次調査』行橋市文化財調査報告書第 33 集 行橋市教育委員会
山口裕平編 2014『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅱ－福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城跡の第 12 次～第
16 次調査』行橋市文化財調査報告書第 53 集 行橋市教育委員会
(唐原城)
末永浩一編 2003『唐原神籠石Ⅰ 福岡県築上郡大平村大字下唐原・土佐井所在山城の調査報告』大平
村文化財調査報告書第 13 集 大平村教育委員会
末永浩一編 2005『唐原神籠石Ⅱ 福岡県築上郡大平村大字下唐原・土佐井所在山城の調査報告』大平
村文化財調査報告書第 16 集 大平村教育委員会
(鹿毛馬城)
井上裕弘編 1984『鹿毛馬神籠石 福岡県嘉穂郡潁田町所在鹿毛馬神籠石の調査』潁田町文化財調査報
告書第 1 集 潁田町教育委員会
(阿志岐城)
草場啓一編 2008『阿志岐城跡 阿志岐城跡確認調査報告書（旧称 宮地岳古代山城跡）』筑紫野市文化
財調査報告書 第 92 集 筑紫野市教育委員会

【図出典】

- 図 1～4：西住・矢野・木村編 2012 図 5：横田編 1991 図 6：田平・亀田編 1977
図 7：古門・本田・田中編 2000、古門・田中編 2003 図 8：山元編 2003、山元編 2008
図 9：金田・岡本編 2013 図 10：出宮・乗岡編 1989 図 11：渡邊 2013
図 12：渡邊編 2012 図 13：小川編 2006、山口編 2014
図 14：末永編 2003、末永編 2005 図 15：井上編 1984 図 16：草場編 2008

※上記の文献から必要な土器実測図を転載している。

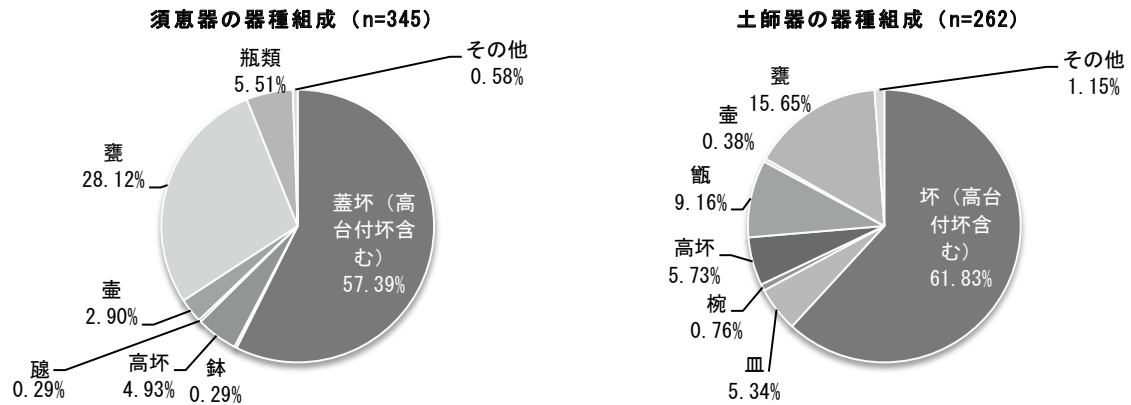


図 1 鞠智城跡出土土器の器種組成

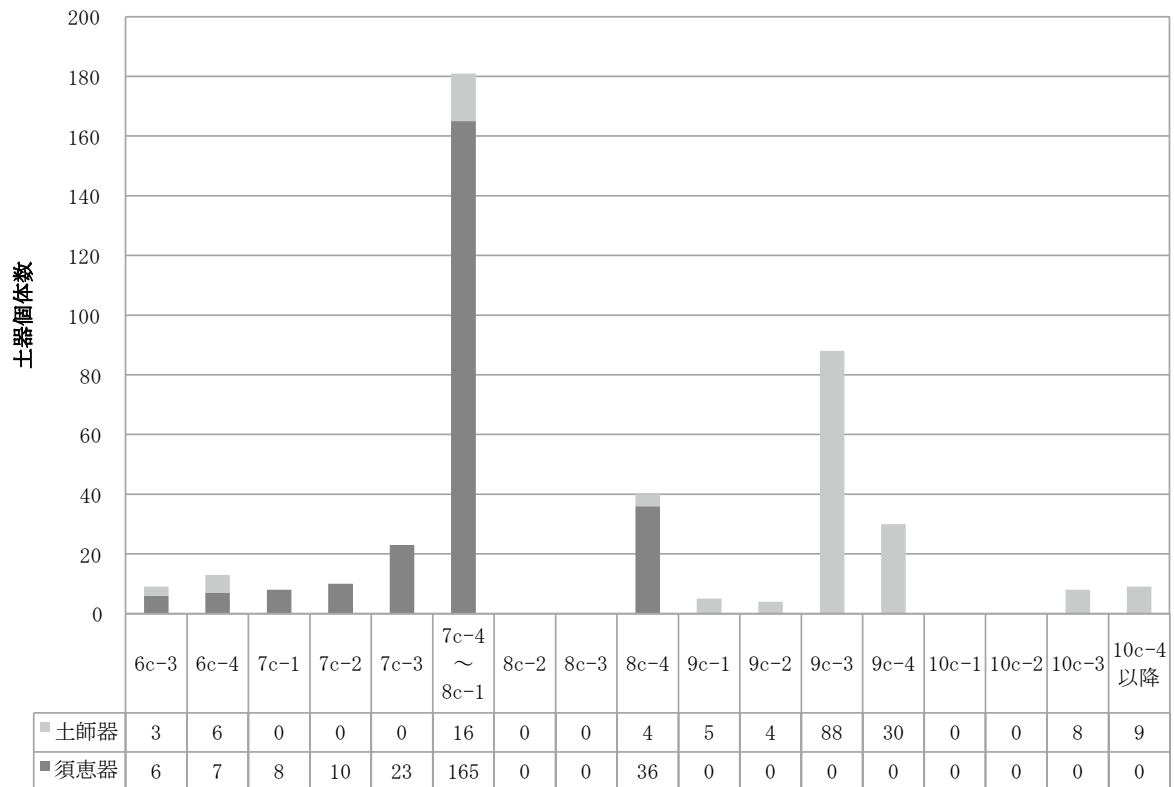


図 3 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図

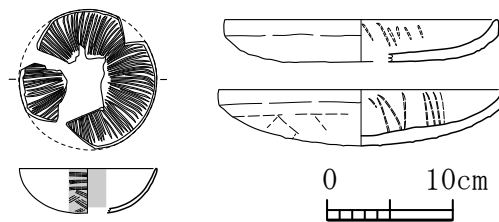


図 4 鞠智城跡出土の畿内系土師器

土器の様相からみた古代山城

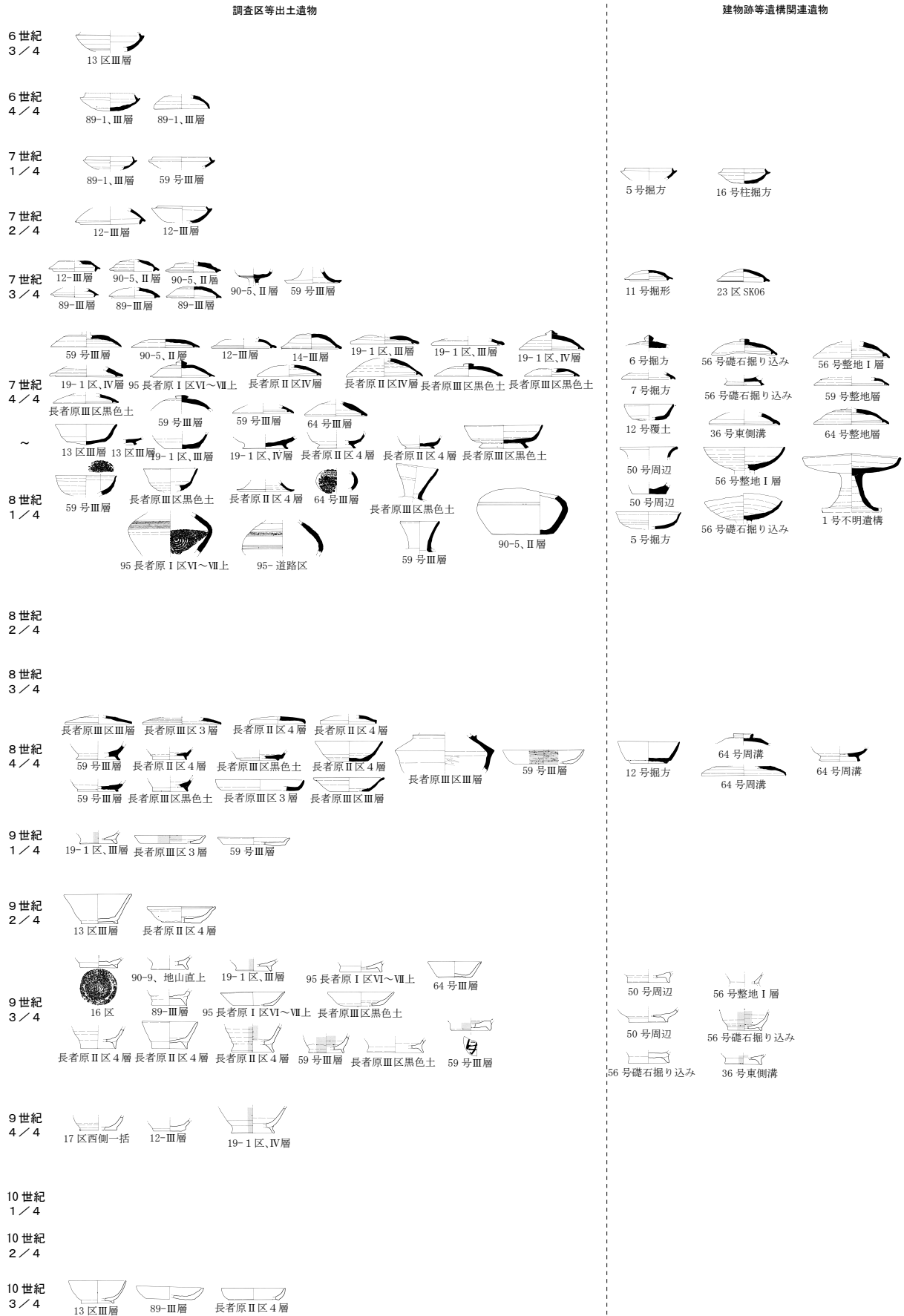


図2 鞠智城跡長者原地区出土土器編年図

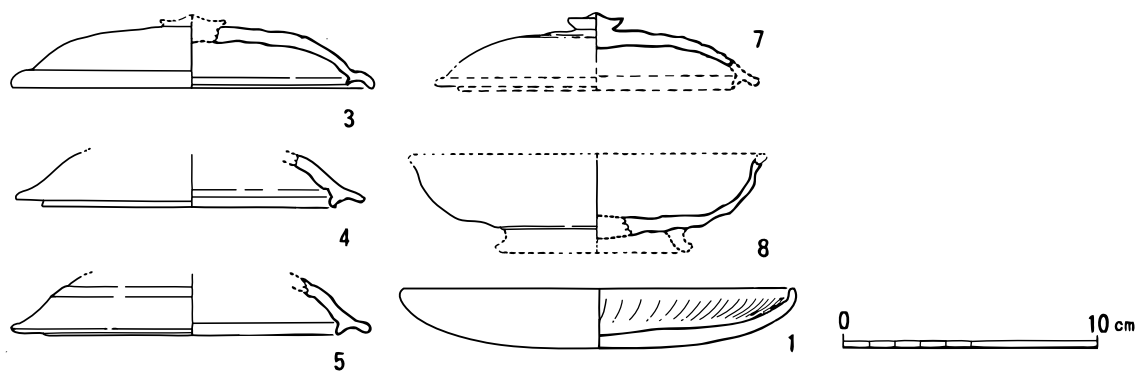


図5 大野城跡太宰府口城門出土土器

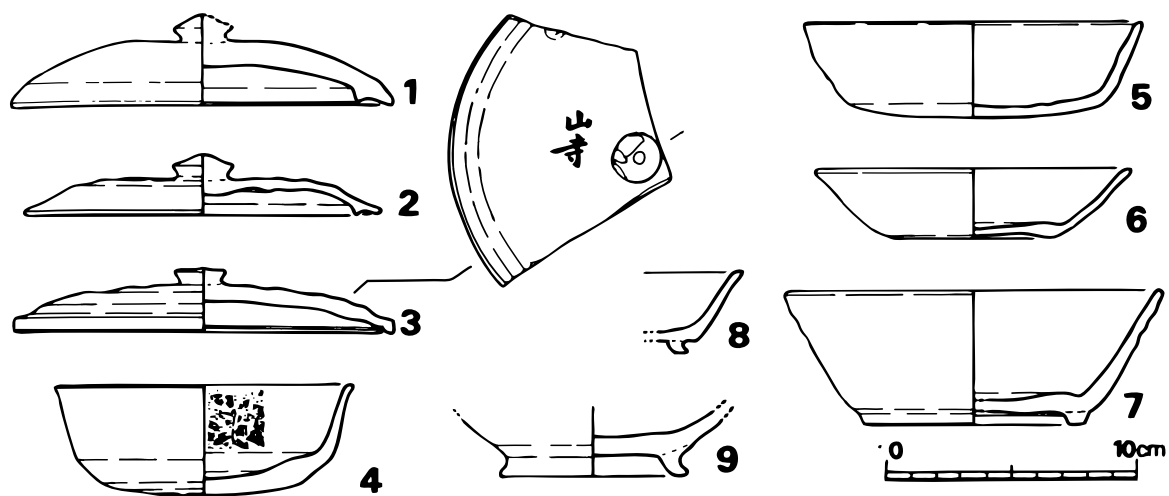


図6 基肄城跡出土土器

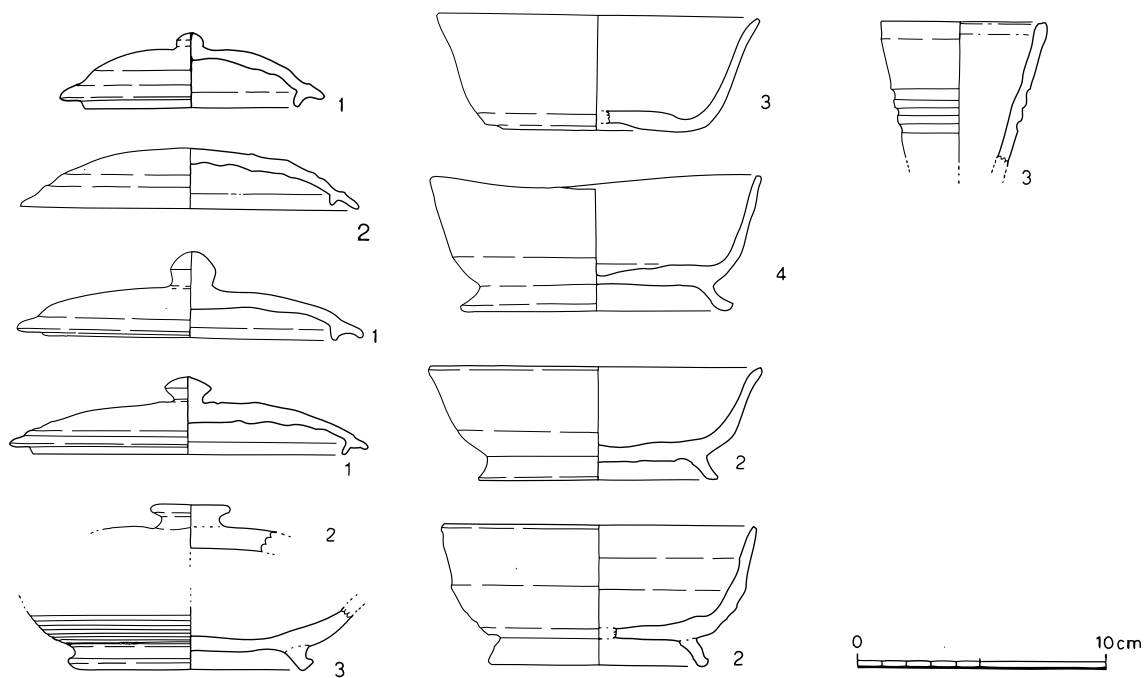


図7 金田城跡出土土器

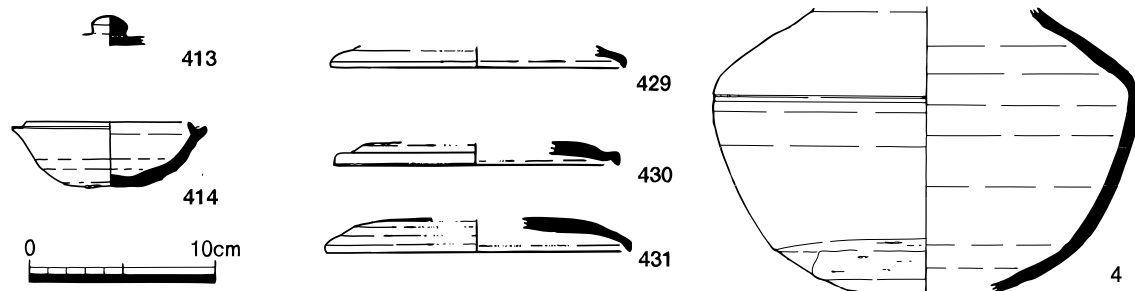


図8 屋嶋城跡出土土器

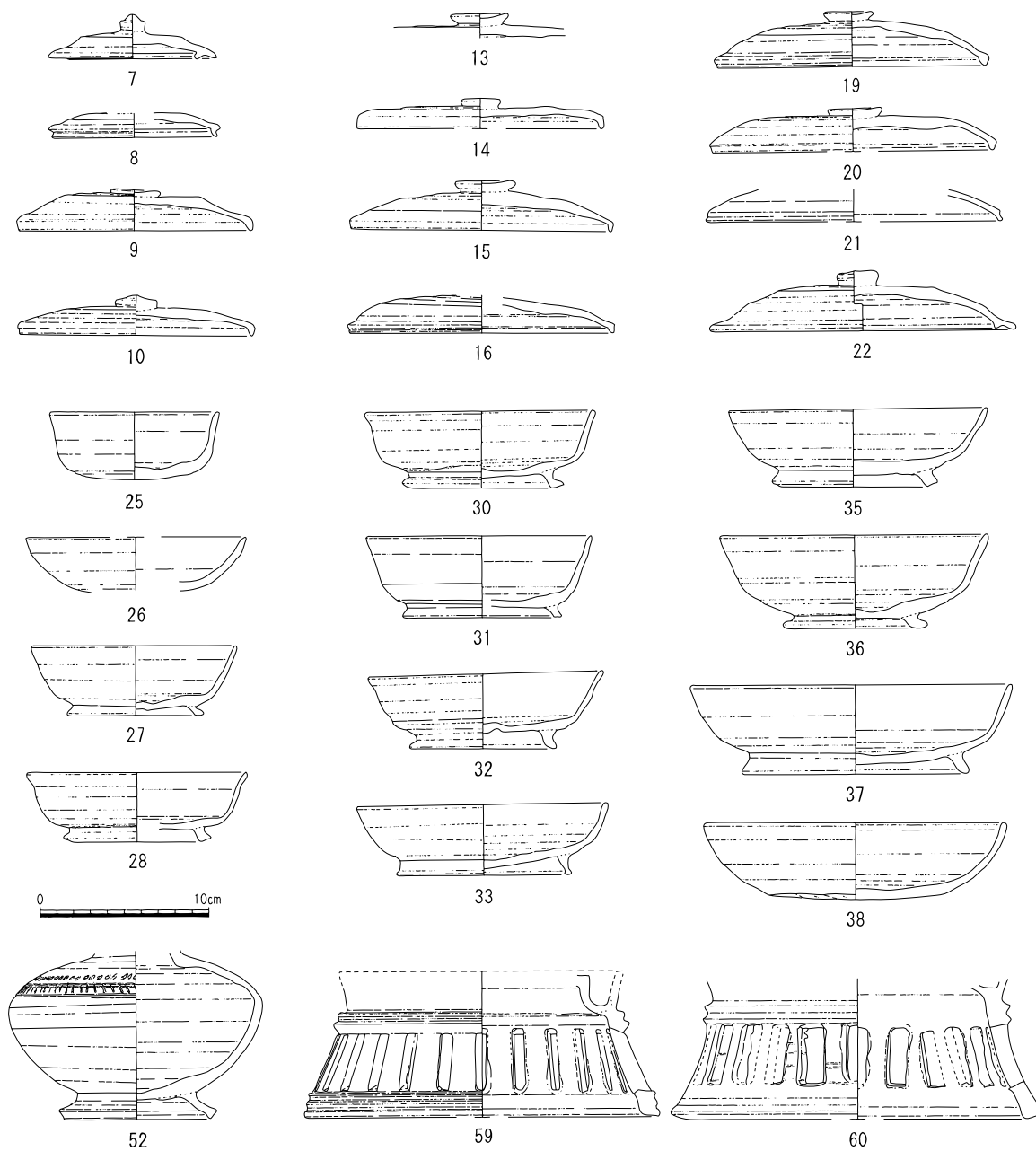


図9 鬼ノ城跡出土土器

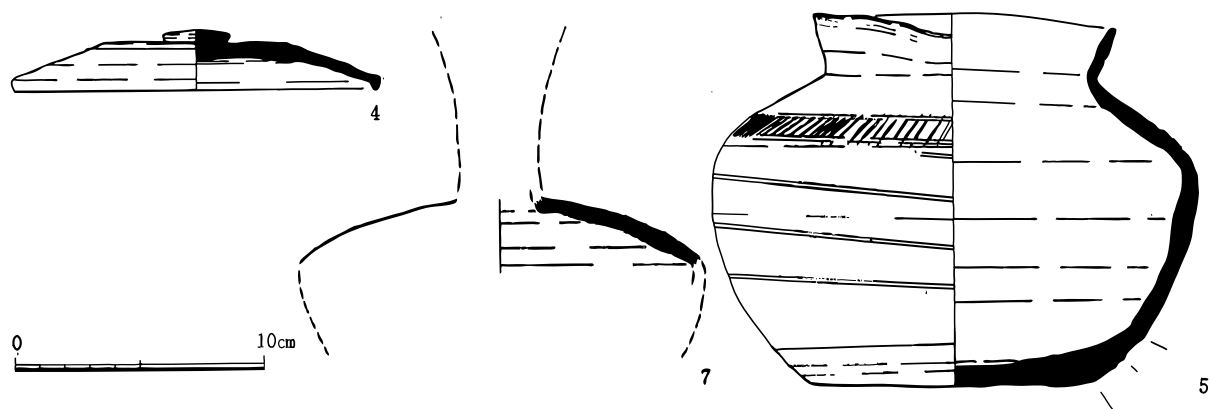


図 10 大廻小廻山城跡出土土器

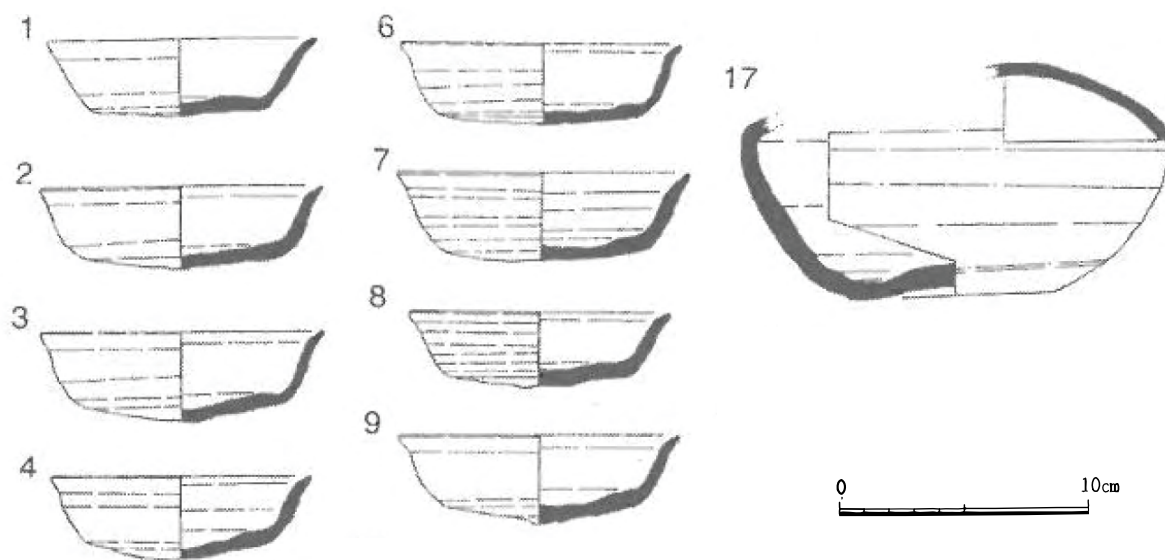


図 11 讃岐城山城跡出土土器

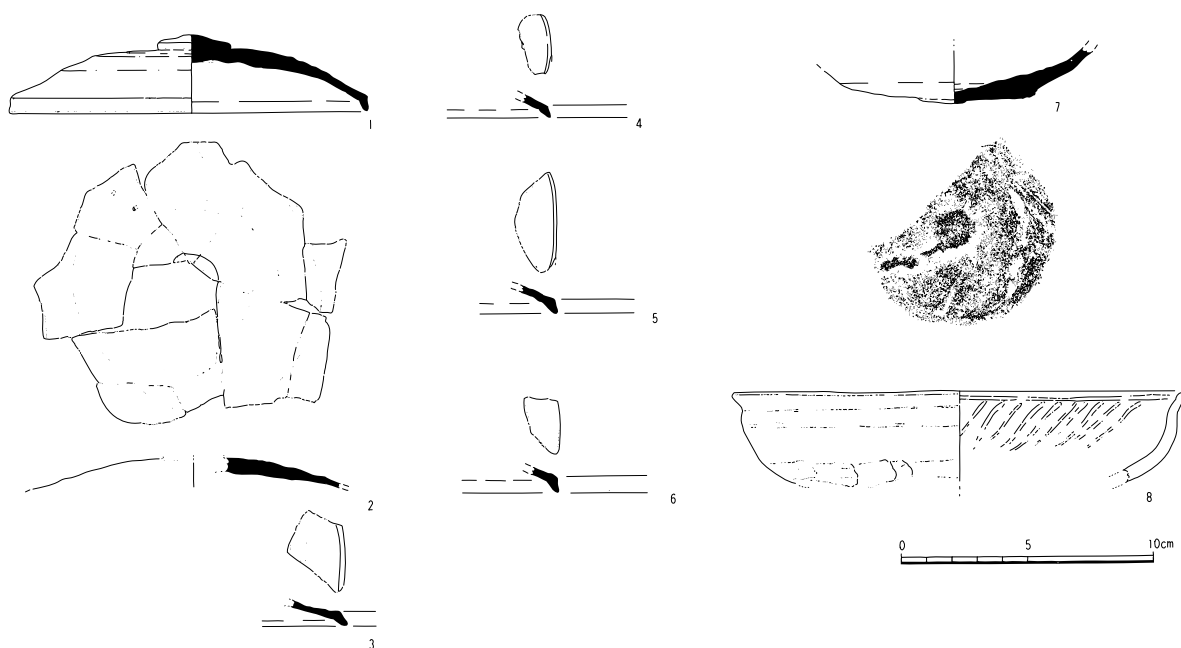


図 12 永納山城跡出土土器

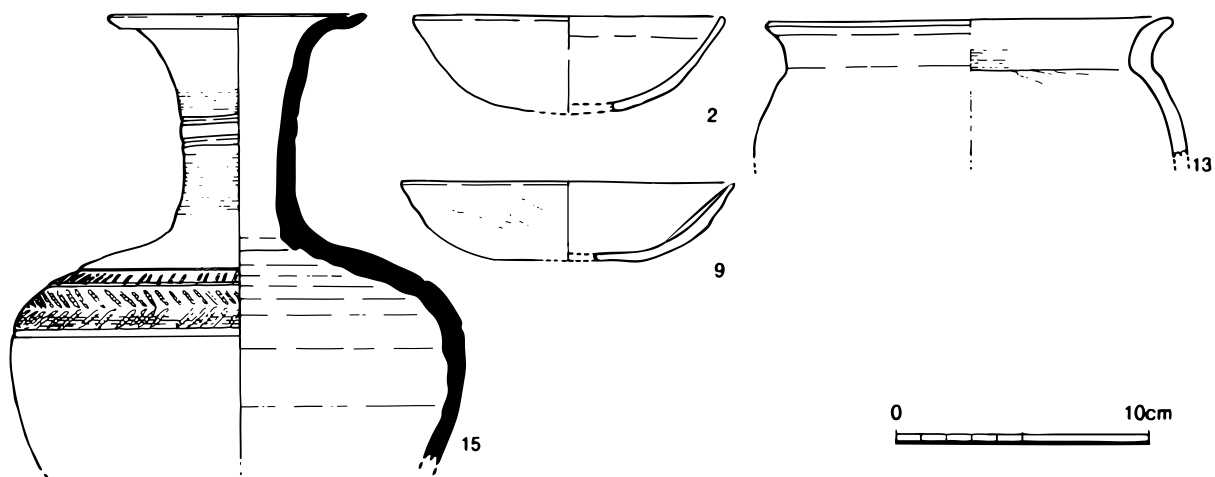


図 13 御所ヶ谷城跡出土土器

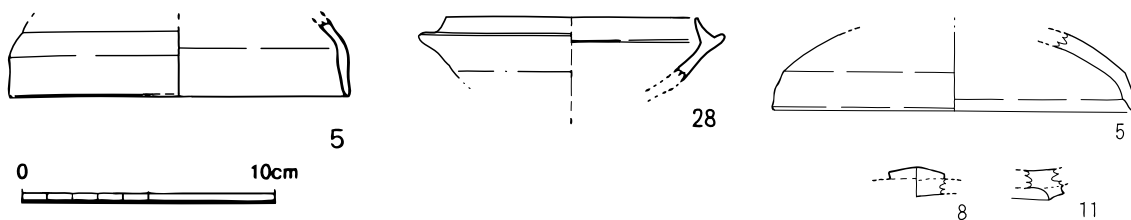


図 14 唐原城跡出土土器

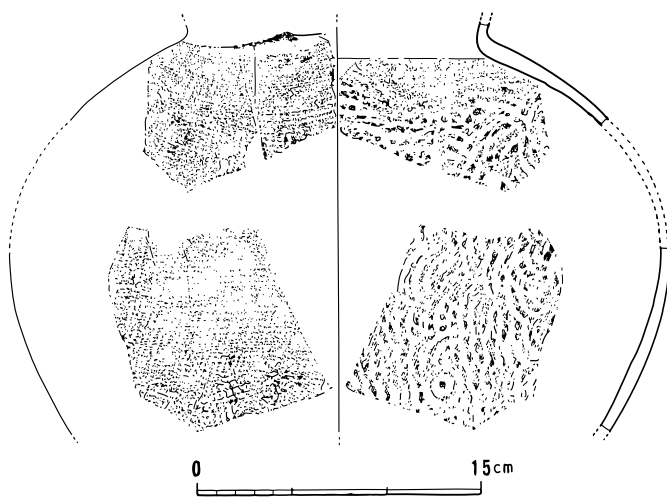


図 15 鹿毛馬城跡出土土器

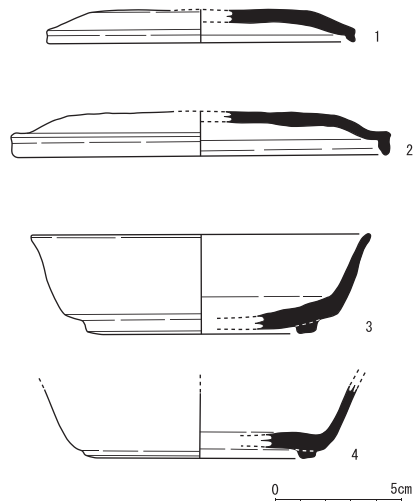


図 16 阿志岐城跡出土土器

表 1 古代山城出土土器数比較表（1）

城名	地点	種類	器種	時期別土器数										
				7C 1/4	7C 2/4	7C 3/4	7C 4/4 ~ 8C 1/4	8C 2/4	8C 3/4	8C 4/4	9C 1/4	9C 2/4	9C 3/4	9C 4/4 以降
大野城跡	八ツ波地区	土師器	蓋坏										2	10
			椀											33
			壺										1	
	猫坂地区	須恵器	蓋坏				2							
		土師器	坏						1	1	1			
	主城原地区	須恵器	蓋坏				4							
			皿				1							
		土師器	坏				1						1	
	村上地区	須恵器	蓋坏				1							
			皿				1							
		土師器	皿											1
	太宰府口 城門	須恵器	蓋坏				7							
		土師器	皿				1							
			坏							1			7	
	鮎返り地区	須恵器	蓋坏			1								
	大石垣上方 内周土塁地区	須恵器	蓋坏			2								
	小石垣地区	須恵器	蓋坏			2								
		土師器	坏										1	
	その他地区	須恵器	蓋坏				4		1					
		土師器	坏									2	7	
	須恵器合計					5	20	0	1	0	0	0	0	0
	土師器合計					0	2	0	1	2	1	2	19	44
	合 計			0	0	5	22	0	2	2	1	2	19	44
基肄城跡	須恵器		蓋坏			10	20			32				
	土師器		坏				2			5				
			皿							8				
	合 計			0	0	10	22	0	0	45	0	0	0	0
金田城跡	須恵器		蓋坏			6	6							
			高坏			1								
			瓶			2	1							
	合 計			0	0	9	7	0	0	0	0	0	0	0
屋嶋城跡	須恵器		蓋坏			2	7							
			壺			1								
			瓶				1							
	合 計			0	0	3	8	0	0	0	0	0	0	0
鞠智城跡	須恵器			8	10	23	165			36				
	土師器						16			4	5	4	88	47
	合 計			8	10	23	181	0	0	40	5	4	88	47

土器の様相からみた古代山城

表2 古代山城出土土器数比較表（2）

城名	地点	種類	器種	時期別土器数										
				7C 1/4	7C 2/4	7C 3/4	7C 4/4 ~ 8C 1/4	8C 2/4	8C 3/4	8C 4/4	9C 1/4	9C 2/4	9C 3/4	9C 4/4 以降
鬼ノ城跡	須恵器	蓋坏				7	104	1		2				
		高坏					15							
		皿					1							
		壺					20							1
		瓶					4							
		甕			1		8							
		硯					3							
	土師器	坏					2							40
		椀					3							23
		皿												13
		甕					7							5
		甗					5							
	合 計			0	0	8	172	1	0	2	0	0	0	82
大廻小廻山城跡	須恵器	蓋坏					1							
		壺					3							
	土師器	坏											11	
		皿											2	
	合 計			0	0	0	4	0	0	0	0	0	13	0
讃岐城跡	須恵器	蓋坏					11							
		平瓶					1							
	合 計			0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0
永納山城跡	須恵器	蓋坏			1	1	6							
	土師器	坏					2							
	合 計			0	1	1	8	0	0	0	0	0	0	0
御所ヶ谷城跡	須恵器	蓋坏					1							
		壺				1								
	土師器	坏					2				1			
		甕				1				1				
	合 計			0	0	2	3	0	0	1	1	0	0	0
唐原城跡	須恵器	蓋坏		2	1		1							
	合 計			2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
鹿毛城跡	須恵器	甕		1										
	合 計			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
阿志城跡	須恵器	蓋坏					4							
	合 計			0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0